

「転ばぬ先の杖」は「転ばない前の杖」に言い換えられるか？

—「(ぬ)さき」と「(ない)まえ」の歴史的変遷—

宮 武 利 江

1. はじめに

「日が暮れない前に帰ってきなさい。」という言い方を聞くことがある。「日が暮れる前に帰ってきなさい。」と同じ意味で用いられ、非論理的表現であるといわれる。たしかに、「日が暮れる」というのは時間軸上特定のポイントであるのに対し、「日が暮れない」は時間軸で言えばそのポイントに至るまでの部分すべてであり、その「前に」という指定はナンセンスである。しかし、「転ばぬ先の杖」のような慣用句にも、同様の表現が含まれており、日本語母語話者にとってそれほど違和感はないように思われる。一方で、「家を出ない前に薬を飲んだ。」というような文を見ると、やはり「家を出る前に…」の方が「正しい」と感じられる。実際、過去には国語教育現場などで、正すべき誤りという主張もあったようだ。^(註1)「寝ない前に歯を磨いた。」はかなりおかしいと感じるのに、「冷めない前に食べちゃって！」だと聞き流せる…。さらに、「転ばぬ先の杖」では「前」ではなく「先」が使われているが、両者はほぼ同義と捉えられているものの、「転ばない前の杖」と言い換えたときには（聞き慣れていないから、という理由だけではない）違和感が存在すると思う。この感覚的許容度の違いはどこからくるのか。

本稿では、現代日本語の「～（し）ない前（に）…（する）」という表現について、過去の日本語における同様の表現の使用状況や「前」と「先」の語の用法の比較などを通して、改めて整理し直してみたい。

2. 先行研究および「前」と「先」

2.1 先行研究

古くは松延（1964）がこの表現を取り上げてその非論理性を指摘したが、そこで示された特徴を永田（1974）・三宅（1989）がまとめている。

「焼ける前」をA型とし、「焼けない前」をB型とすると、A型は①

事実や行為を前提とするとき②行為以前の状態を強調するとき③次の行為の直前の行為であることを示すときで、「その行為や事実を認めて、その「××する前」のことを説明する」(永田)のに対し、**B型**は①そのとき、その行為・事実はなかった、ということ強調するとき②その事実・行為を忌避するときで、「言い換えれば、そのような事実や行為は存在して欲しくない。できることならこのままの状態であって欲しいという意識の強調である」(松延)。

永田(1974)は、**B型**を**A型**に換言すると、論理的意味は変わらなくとも「心理的意味は変わってくる」とし、**B型**には「そうやってほしくない、その事実のないことを希望する心理が込められている」から、国語教育において**B型**表現を直ちに**A型**に「正す」べきとするのが良いのかと疑問を呈している。

三宅(1989)は、松延が触れなかった古文の用例を調査し、例えば『源氏物語』ではこの表現と考えられる用例(16例)がすべて「～ぬさきに…」であることを明らかにし、まず、「源氏において「ぬさき」は「肯定+さき」に対立する表現ではなく、「否定+時間的範囲を表す語」に対立する表現だったのではないかとする。「時間的範囲を表す語」として「ほど」を挙げて「否定+ほど」の文と比較した結果、「～せぬさきに…する」の文では「…する」の部分が意志や命令の「主体的表現」がほとんどであることから、「…する」という行為の実現を強く望んでおり、「…する」ことによって「～する」行為及びそれによって引き起こされる状態を強く打ち消したい気持ちが反映されたのが「～せぬさきに」という表現だったのではないかという。「～」部分は「話者にとって忌避したくなるようなもの」であるという解釈は松延と同じ結論ということになるが、中世の用例まで調査範囲を広げると、「ぬさき」が「主体的表現」であるという傾向が弱くなり、「「さき」が時間的な「前」ではなく、単に時間的範囲を示すに過ぎなくなる」と言っており、現代語については解釈が異なる可能性がある。

柏原(1972)は、キリシタン資料のローマ字表記「banjiuo tcutome voconauanu mayeni, cocorouo tcucuite xiriouo cuuayei (万事を努め行わぬ前に心を尽くいて思慮を加えい)」を「～ぬまえに…」の確例として引き「この打ち消しの語を先導とする表現では、どうも中世までマエは用いられていなかったのではないかと」言う。さらに、『ロドリゲス大文典』の記述「上げぬ {以前に／先に／前に／}

Antequam (ラテン語「以前に」)に相当する。いつも否定である。「この言ひ方では、書かぬ先に、又は、以前、等のやうに、前の代わりに先に、又は以前を使ふこともできる」を紹介し、この時期「三つの語が併用されていたことが明確になる」と述べている。

では、三宅の指摘する「ぬ先」の中世からの用法変化と、「ぬ前」の出現とは関連があるのではないか。ここで、「さき」と「まえ」の語義用法を確認しておきたい。

2.2 「前(まえ)」と「先(さき)」

日本国語大辞典では、「前(まえ)」の意味として、

〔一〕空間的に前方または前部を表わす。

〔二〕(多く接頭語「御(お・おん)」を伴って用いる。→おまえ・おんまえ)神仏あるいは貴人に面する意で、そこに伺候すること、転じて、神仏貴人そのものをさし、さらに、そこに供えるものなどをいう。

〔三〕時間的に前方、またはさかのぼっての事柄を表わす。

〔四〕「…の前」の形で体言格を受けて形式名詞のように用いる。

と大きく4つのブランチを立てているが、空間的な前方を表す〔一〕の意とそれから比喩的に派生した〔二〕の用法が古く、初出として古事記や万葉集が挙げられている。時間的な前方を表す〔三〕の用法の出現は、「過去」を表す例の初出が12世紀『大鏡』、さらに、「～ぬ前」のような「以前」の意を表す例の出現は14世紀の『太平記』まで待たねばならない。(続いて挙げられているのはキリシタン資料の『日葡辞書』である。)以下、煩雑となるが確認のため〔三〕の小ブランチを掲げておく。

(1)既に経過した時。過去。*大鏡〔12C前〕三・伊尹「まへの日事いださせたまへりしたびのことぞかし」*はやり唄〔1902〕(小杉天外)七「以前(マへ)から伺って存じて居ります」

(2)ある時点より早い時期。以前。*太平記〔14C後〕七・千劔破城軍事「前の勢八十万騎に、又赤坂の勢吉野の勢馳加て、百万騎に余りければ」*日葡辞書〔1603～04〕「マイラヌ maye (マエ)」*家〔1910～11〕(島崎藤村)上・三「故郷にあった小泉の家—その焼けない前のことは」

(3)順番が一つ早い方。直前。「前の校長」*或る朝〔1908〕(志賀直哉)「祖父の三回忌の法事のある前の晩」

(4)現在。眼前の時。＊随筆・胆大小心録〔1808〕四「韓退之のおしやりし、前のほまれあらんよりは、後のそしりをおもへとぞ」

(5)かつてあった事柄、事例。

(イ)以前あった事例。前例。＊上杉家文書 - 大永六年〔1526〕

(ロ)犯罪者について、その人の過去の罪。前科。〔隠語全集{1952}〕

一方、「先」は、ブランチは9つだが、(8)(9)は略語なので実質7つ。うち、(1)「先端」と(2)「空間的に前方」、そして(3)「時間的前方」も8世紀の記紀・万葉の例がある。(そして、(3)の万葉の例は「もの言はぬ先に」、太平記も「未だ見えざるさきに」と、「否定+さき」の表現である。)(4)「後」・「将来」や(6)相手(先方)を表す用法は中世・近世のものとなっている。(3)のみ用例を引いておく。

(3)時間的にそれより前。その時より前。⇔あと。

(イ)それが行なわれる前、また、直前。＊日本書紀〔720〕神代下(寛文版訓)「是(これ)より先(サキ)天稚彦と味耜高彦神(あちすきたかひこねのかみ)と友善(うるは)し」＊万葉集〔8C後〕一六・三七九五「恥を忍び恥を黙(もだ)して事も無く物言はぬ先に我は寄りなむ(作者未詳)」＊後撰和歌集〔951～953頃〕秋下・四一一「葦引の山のもみぢば散りにけり嵐のさきに見てまし物をくよみ人しらず」＊太平記〔14C後〕一九・金崎東宮并將軍宮御隱事「病の未だ見えざるさきに、兼て療治を加る程に」＊ロドリゲス日本大文典〔1604～08〕「マヅ カタリマラショウズルヲ コトバノ saquiga (サキガ) ヲリナウテ タダイマ マウス〔豊後物語〕」＊虎明本狂言・鍋八撥〔室町末～近世初〕「某よりさきへまいった者はなひと見えた」＊滑稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕二・上「大かた雪陣(せっちゃん)だろふ。さきへやらかせ」＊油地獄〔1891〕(斎藤緑雨)八「膳の出ない先(サキ)から賑かであったが」

(ロ)今に近い過去のある時。現在より以前。さっき。＊古事記〔712〕「故、其の八上比売は、先(さき)の期(ちぎり)の如く美刀阿多波志都(みとあたはしつ)〈此の七字は音を以る〉」＊源氏物語〔1000～14頃〕総角「さきの春も、花見に訪ね参り来しこれかれ」＊蓬曲〔1891〕(北村透谷)二・五「先(サキ)の旅客ならずや」＊即興詩人〔1891〕(森鷗

外訳) 人火天火「疇昔(サキ)の日おん身が物思はしげに打沈みてのみ居給ひしとき」

(ハ) 今の世から遠くへだたった過去。むかし。→いんさき。*源氏物語〔1001～14頃〕

(ニ) 「先の」の形で、かつて、また現任者の前に、ある官職にあったことをいう。先代。前任。前(ぜん)。*土左日記〔935頃〕

3. 用例検討

3.1 古語の調査

今回、古語の「～(せ)ぬサキ(に/から/の)」及び「～ぬマへ」の用例調査には、日本語歴史コーパス(CHJ)(注2)とジャパンナレッジの『新編日本古典文学全集』を利用した。「～ぬサキ」の例は、総計で157例で、内訳は上代3例(うち、万葉集1例は「前」の訓、古事記1例は「以前」の訓である)、中古が88例、中世は鎌倉17例・室町24例、近世が68例、歴史コーパス範囲内の明治以降が25例となった。まずは最古の古事記・万葉集、及び和歌の例を挙げる。(本文は『新日本古典文学全集』による。)

・『古事記』

未神避以前所生(未だ神避らぬ以前(サキ)に生めるぞ)。

・『万葉集』

物不言先丹(物言はぬ先(サキ)に)我は寄りなむ(巻16・3795)

※巻11・2377「不恋前(恋せぬ前(サキ)に)死なましものを」は漢字表記「前」だが、一般的に「さき」と訓じている。これを数えれば2例となる。

・『古今集』2例

今はとて別るときは天の川渡らぬさきに袖ぞひちぬる(巻4秋上)

別るれど嬉しくもあるか今宵よりあひ見ぬさきに何を恋まし(巻8離別)

以後、『拾遺集』1例、『後拾遺集』では詞書のみ3例、『金葉集』も詞書1例、『詞花集』なし、『千載集』5例、『新古今集』3例となっているが、『千載集』では「あひ見ぬさきの別れなりけれ／あひ見ぬさきに恋しかるらん／あひ見ぬさきのつらさなりせば」と、パターン化がうかがえる。

『源氏物語』には「～(せ)ぬサキ(に/から/の)…する」の用例が14例(類例の「～ざらんさきに」1例と「まだしきさきに」1例を

加えると16例) あるが、「マへ」を用いた例は一例もない。このうち15例が会話・心話文中に現れる意志・命令表現で、平叙文は1例のみ(「節分とかいふ事まだしきさきに渡し奉りたまふ」)であること、既に三宅(1989)が指摘した通りである。

「～(せ)ぬ」の内容は、夜が明けない・夜が更けない・日が高くない等の時間的制約が多く、続いて恥・罪などが大きくなる(前に死んでしまいたい)のようなタイプがある。中古の他作品の例も、ほぼ同様の傾向のため、ここでは源氏の例を示しておく。

- (1) 「…はやおはしまして、夜更けぬさきに帰らせおはしませ」(惟光が源氏に促す) [夕顔] 類例1
- (2) 「ともあれかくもあれ、夜の明けはてぬさきに御舟に奉れ」(従者が源氏に促す) [明石] 類例1
- (3) はしたなきほどにならぬさきにと、例の急ぎ出でたまひて… [夕顔]
- (4) 門など鎖さぬさきにと急ぎおはす [空蟬]
- (5) 山の紅葉散らぬさきに参るべきよし聞こえたまふ [橋姫]
- (6) 「…これより大きな恥にのぞまぬさきに世をのがれなむと思ふたまへ立ちぬる」 [須磨]
- (7) 罪などいと深からぬさき、いかで亡くなりなむ、と思し沈むに… [総角]
- (8) さらにぬ世を見はてぬさきに心と背きにしがなと… [若菜下]
- (9) さらにぬさきに、さもやほのめかしてまし、など… [宿木]

※万葉集にあったような反実仮想の「まし」が用いられているなお、「～ざる(ざりつる・ざりける・ざらんを含む)サキ」は、記紀の訓読及び和漢朗詠集を除くと『枕草子』の次の例が最も古く、中古より後は中世が47例(うち31例が『太平記』)、近世が1例であった。他に「なからんサキ」が1例ある。

- (10) 「さて、呼び返さざりつるさきは、いかが言ひつる」(呼び返さなかつた前は、どう言ったのか)(『枕草子』)

これらの「否定+サキ」に対し、否定辞のない「動詞の連体形+サキ」は、120例ほどあるほぼすべての「サキ」が「行く先」の意味で、「以前」の意の「～するサキに」の用例はないといってよい。ただ、中世に「この花散らさむ先に」(とはずがたり)「まかでたまはらんさきに」(栄花物語)「さらん先に」(義経記)という、助動詞「む」+サキで以前を表す形があり、さらに人情本で2例のみ、動詞連体形+

サキが用いられていた。(ちなみに名詞+「よりサキ」は記紀で「以前」をサキと訓ませる例を含んで計30例以上あり、以後継続的に使われている。)

一方、「～(せ)ぬマへ」の例は、1252年成立の『十訓抄』に「人の取り出ださぬ前に飛び出でて」とあるのが最も古い例のようだが、底本が「前」の漢字表記のため確例とするには疑問が残る。その後は水無瀬三吟百韻の古注に「雪のふらぬまへはすさまじくて」とあるのが確認できたが、年代の特定は難しい。確実な例は天草版平家の1例、伊曾保の2例(柏原(1972)が引いた他に「mazzu cotouo fajimenu maye ni sono vouariuo miru mono gia. (まづ事を始めぬマエにその終わりを見るものぢゃ)」がある)となり、さらに19世紀前半の人情本に1例見られるのみで近世の例はほぼないといってよい。19世紀後半からは増加していき、例えば19世紀末から20世紀前半に刊行された雑誌『太陽』には19例ある。「～ない前」は1900年代の『太陽』に24例認められ、この時期「ぬ前」と「ない前」が拮抗している。「～ないサキ」は『太陽』に4例ある。

ところで、否定辞のない「～する前(まへ・まえ)」は中古の用例7例と室町の2例すべてが空間的な前方の意であり、洒落本・人情本では10例で、時間的に前の意と前方の意が半々である。明治以降は355例と爆発的に増えるが、そのほとんどが時間的に前の意となっており、否定辞のない「～サキ」をはるかに上回る。「～(する)以前」を表す表現として、「～(せ)ぬサキ」から「～(し)ない前」をわずかに経た後に、一気に「～(する)前」へ交代したことが見て取れる。とすると、「ぬ先」から「ぬ前」、そして「ない前」へという単純な変化では説明できないことになる。

3.2 現代語の調査

今回、現代語の「～ない／ぬマエ」「～ない／ぬサキ」の用例調査には、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ-NT)(注3)を利用した。

まず、「～ないマエ」を検索すると、34例が見つかった。(「～ぬマエ」は13例であった。)出典は小説が多い(1・2・3・6・9)が、ビジネス書等(4・7・8)、国会会議録(5)もある。

- (1)「あなたが間違ったことをしない前に、一刻も早くつかまえないきゃならないと思ったの」

(2) 事が起きない前に、万が一の場合にそなえて、毒殺するよ
うにと…

のような、古代の用法と同類のもの他に、(3) (4) のように後半が
意志や命令でないもの、

(3) 夜も明けない前に何事ですかと…

(4) 「…できそうもない」なんて、やらない前から悩んでいたり…
さらには前半が「忌避すべき事態」とは全く逆のタイプも7例存在す
る。

(5) 農林大臣の承認をしない前に土地売買の予約契約を行った

(6) 将軍様やお武家様が口にしない前に、密かに食べてしまう不
心得な金持ちなどがいないか

(7) 急がないと恩返しをしおわらない前に母に死なれてしまう

「前」に続く語は「に・から・の」以外に「は」や「だ・で」もあり、
多様性が見られる。

(8) 仏教がまだ浸透しない前は、おもな民間宗教といってよかつ
た

(9) 「何も身に着けない前だったりしたら、たいへんなことになる
わ」

しかし、「～」部分に否定辞のない動詞連体形に「前」がつく形は、
検索では9313件ヒットし、コーパスのシステム上実際に見られる500
例を見る限りでは、ほぼ「時間的に前」の意で使われており、現代語
では圧倒的に「～する前に…する」表現になっていることが明確であ
る。

一方、「～ぬサキ」も38例あったが、そのうち21例は「転ばぬ先の
杖」、6例が「転ばぬ先の(〇〇)」、1例が「転ばぬ先から」、3例が
「七草の歌(「唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に…」等)」で、「暮れぬ
さきから灯している」のような中世以前と同様の例は7例に留まった。
「～ないサキ」は11例で、意志や命令表現はなかった。「生まれぬ
先の赤ん坊」「起こらない先から」の2例以外は「先に」である。この
うち4例が漱石(『我が輩は猫である』が2, 『明暗』が2)なのは面白い。
いずれにしても、「～ぬ／ないサキ」は、化石的用法となっていると
言ってもよいだろう。

(10) 彼は、招ぜられない先に、まず自分から設けの席に着いた
(『明暗』)

(11) その内容を聞かない先に、「そらええ考えだなあ」と、まずい

うことである（書籍）

- (12) さっき警官の来ない先に、探してみた時にはなにもなかったですよ（小説）

否定辞のない連体形＋サキは1000例以上ヒットしたが、用例を確認できた500例のほとんどが「先方、相手」の意で、空間的前方が少し混じる程度であり、時間的に前であることを言う例は1例確認できたのみであった。

4. 当該表現の特徴

2019年8月の文教大学言語文化研究所夏期講座において、誠信女子大学の安平鎬教授の講義内でこの問題に触れた部分があった。安平鎬氏は〈「(する)マエ節」における「する形」は、主節との時間的な前後関係を示す（時間的に主節の事象→マエ節の事象の順で起きる）〉という先行研究の解釈が成り立たない、「老いる前にお金を貯めておいてください」等の文の違和感や、「お金を払わない前に子どもにお菓子を食べさせる」等の「～(し)ない前に…」文の存在を説明するために、以下の考察を示された。

- ① 日が暮れる前に 街に戻って、一眠りしてから仕事にかかりたいんです。
S1 S2

では、S1が「事態の時間関係を認識する基準点」であり、S2がS1に先行して起きるということを表すが、

- ② 顔を洗う前に、寝床でミルクを飲む。
S1 S2

ではS1が基準点でありS2がS1より先行して起きるということは同じでも、①と②では「前」が指し示す時点の幅があるかないかが異なるとする。(①ではS2の事態は「前」が指す「時」に含まれるが、②では同時であるという。)

さらに、

- ③ 人間としての尊厳を失わない前に この世を去りたいと思う。
S1 S2

では、「S1が指し示す期間中にS2の事態が起こることを表し」、なおかつS1は基準点ではないと述べる。

つまり、安氏が言いたいのは①や②では「街に戻る」→「日が暮れる」の順にしたい、とか、「ミルクを飲む」→「顔を洗う」の順にします、ということだが、③では「この世を去る」ことが主眼というよ

り、「人間としての尊厳を失わない」方に軸足があるということだと筆者は理解した。そして、①や③の「前」は「直前」ではなく、ある「幅」を持っていることになる。

古語において、「さき」の語は時間的に先行することを表す用法があり、直前の意を表すこともあったと辞書では説明されている。しかし、少なくとも中古までは否定辞の後に用いられると、それは現代語の「～しないうち」に近い働きをしていたと解せる。動詞連体形に「より」を付して「さき」を続ける、「聞くより先に走り出していた」のような例が古語には存在せず、「より先」は「これより先」といった名詞に続く用法のみなのは、状態・動作の先後性を表す語としての「さき」に、何らかの限定があったためではないだろうか。禅宗の用語で「父母未生以前」という言葉があり、「両親がまだ生まれない、そのもっと前」というような意味だが、このような漢語の「未だ…ぬ以前」という表現の影響も想定できるかもしれない。実際、漢文訓読系の作品では「いまだ～ぬさき…」と「いまだ」が冠せられている例が非常に多い(『太平記』など)。しかし、それよりも重要なのは古語の「さき」の意味であると思われる。古語の「さき」は、現代語の「まえ」とは異なり、前接の語句が状態・動作を表す場合、その事態を含んでのそれ以前の時間、という意を示すものだったのではないだろうか。例えば「夜の明ける先に」とすると、「夜が明ける」ときを起点にして、その瞬間も含めた「前」を指すことになってしまうので、「まだ夜が明けていない間に」と言いたいなら「夜の明けぬ先」としなければならなかったのではないかということである。「夜の明けぬ先」は、いつかそのうち夜が明けるのは間違いないが、それを限界点のように設定して「その時点より前」と言うのではなく、夜が明けていない状態こそを起点としていと考えられないだろうか。「罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ」という場合は、罪がさらに深くなるかどうか、あるいは到達点としての「罪のいと深きとき」がいつ訪れるかはわからないから、それを起点にするわけではない。「まだ深くならないでいる」、「未然」の状態の内に死んでしまいたい…ということである。「～する」ときがいつかということには焦点がないままに、「～しないでいる」状況を含んでそれ以前に「…する」という述べ方になっていると思われる。このような働きを持った「先」の語が、単純に時間的前方を表す「前」に交代するとともに、もともとあった後項の意志・命令などの「主体的表現」性が薄れ、「～しな

い前に…する」がごく普通の物事の時間的生起順を示す文となっていくと、「論理的整合性」が優先されて「～する前に…する」型に変わっていったのではないだろうか。しかし、その中で、かつて用いられていた、物事が生起する時点より「～していない」状況に光を当てて、意志や命令が後続する「～せぬ先に…」表現が細々と生き続け、「先」を「前」に置き換えた形で「人間としての尊厳を失わない前にこの世を去りたい」や「日が暮れない前に帰ってきなさい」のような文が場合によっては使われている、というのが現在の状況だと考えられる。さらに、「許可を得ない前に工事を始めた」のような、前項の行為が後項の生起にとって必須のはずなのに、順序が違っている、というような非難のニュアンスのある「～ない前に…する」文の用法が新たに生まれていると見られる。

これまでの先行研究では、現代語でも古語でも、「～しない前に…」 「～せぬ先に…」 という表現は、「～」の部分に示されるような事実や行為は存在して欲しくない、という意識のもとに現れると言われているようだが、現代語の例を見る限り、上に述べたような「～」すべきなのにしていない」といったニュアンスがうかがえるものが少なからず存在する。また、古語においても、「～」部分そのものが「忌避したくなる」事態というわけではなく、「～してしまった状態で…する」ことを避けたいのであって、言い換えれば、「～という事態が生起していない状態で、…することが望ましい」という、「先（前）に」の前項と後項との関係性を見るべきだと思う。ただし、これは「～せぬさきに」が現れるのが意志や命令表現に限られていた時代のことであって、近世以降は「望ましい」かどうかは必須でなくなる。それでも、現代語において「～しない前に」が全く同じであっても、後項に意志や依頼・命令といった表現がくると「正しさ」の判断が変わることはあるように思う。例えば、「寝ない前にミルクを飲む」に違和感があっても、「寝ない前に電話をください」だと許容度が上がるのではないかと筆者は感じるが、この辺りは個人差が大きいところかもしれない。そしてこのような文と「許可を得ない前に工事を始めた」などの文に共通するのは、「～ない前に」を「～ないうちに」に置き換えられるということだ。もし現代語の「～しない前に」が誤用というなら、それは「～する前に」の誤用ではなく、「～しないうちに」の誤用と捉えるべきなのではないだろうか。

注1 西谷元夫「表現上の問題二つ」『解釈』19-5 (1973.5)

注2 国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス』
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2019年10月5日確認)

奈良時代から鎌倉時代の作品の本文は小学館『新編古典文学全集』による。室町時代編は『虎明本狂言集』『天草版平家物語・伊曾保物語』、江戸時代編は洒落本30作品と人情本8作品のデータを公開。さらに、明治・大正編として、明治期から大正期までの各年代(1874~1925)を代表する雑誌の一定の年数ごとの刊行分、小学校・高等小学校で使用された国定国語科教科書、明治初期に刊行された主要な口語資料のデータを収録している。

注3 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)は、国立国語研究所によって現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。収録対象の刊行年代は、最大30年間(1976~2005)で、メインとなる書籍の場合は、1986~2005年となっている。(2019年10月5日確認)

※上代~鎌倉期作品の用例本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。

<参考文献>

松延市次(1964)『講座現代語』6 明治書院

永田友市(1972)「「ころばぬ先の杖」所感」『解釈』20-2 解釈学会

柏原司郎(1972)「「焼けない前」と「焼けぬ先」と」『語学文学』むぎ書房

三宅清(1989)「「ぬ前(さき)」考 源氏物語を中心として」『岡山大学教育学部研究集録』81 岡山大学

(本学教授)